幼稚園の源流を求める旅

森有礼の第二次在米時代(5)

アメリカでの新たな出会い

国吉　栄

ワシントン着任まで

二〇〇六（平成18）年、ワシントンに到着した私は、ホテルに荷物を置き、周辺の地図をもらってM街に向かった。日本弁務使館があった場所である。森有礼が館員たちと学生下宿のように住んだといわれる弁務使館。現在の、すべてが整ったところに赴任するのとはまったく違う、何もないところから始まる外交官の生活。

森と同時期に鮫島尚信が欧州に派遣されていた。米欧で日本の外交を拓いた二人が、共にハリスに忠誠を誓って帰国した人物であったことは興味深い。鮫島は派遣先が歴史と伝統を誇るヨーロッパであったため、新米外交官として森以上に苦労した。その彼を顧問として助けたのは、薩摩藩留学生をハリスに誘引した英国貴族オリファントの友人であった。森の場合はどうだったのだろう。誰か援助者はいたのだろうか。

それにしても森の外交官時代の人脈には目を見張るものがある。まだ造営中だった新興人工都市ワシントンを

本拠地に、どのようにあれほどの人脈をつくったのか。いや、人脈などという即物的な語はふさわしくない、心からの協力者をつくったのか。

日本弁務使館があった場所には、コーヒーのチェーン店、スターバックスが入っていた。M街に面したカウンターに座ってコーヒーを飲み、ぼんやり通りを眺めながら、彼のここまでの道のりを思い浮かべた。

私がどうしても気になっていたのは、彼がワシントン着任までの旅程を、大陸横断の途中、突然変更したことであった。当時エリー湖畔のブロクトンにあったハリスのコロニーには、英国から渡った六人の学生のうち最年少の少年が暮らしており、森赴任前後数か月の彼の日記が残されている。それによれば、森はアメリカ派遣が決まるとすぐに、コロニーに知らせた。そしてサンフランシスコ到着後、同地在住の日本領事を通してその返事を受け取っている。今日の外交のあり方からすれば奇妙なことであるが、サンフランシスコにはブルークスというアメリカ人の日本領事がいた。彼は幕末からの親日家で、いまだ駐在外交官を置いていなかった日本政府が領事として委嘱していた人物である。

ブロクトンからの手紙を受け取った森は、日本人十四人でそちらに向かうと返信した。十四人とは、森と属官三人のほかは、森自身が連れていった、あるいは同行を依頼された者たちで、身分や立場は異なるものの、大きく括ればくくれば米国で学ぶことを志す留学生たちであった。ハリスはコロニー内に日本人のための学校を開く準備に取り掛かる。ところが、手紙がコロニーに届いた直後に追いかけるように森からの電報が届いた。二週間はそちらに行けなくなった、と知らせる電報である。

森はなぜ予定を変更したのか。東海岸に出る前に留学生を引き連れてブロクトンに行くというのは、旅のルートとしては自然であるが、外交官として赴任する途上の行動としては異様である。予定の変更は当然であろう。しかしこれまでの私のささやかな森研究から考えて、私には、彼が自分自身でそうしようと決めていた重要な予定を、さしたる理由もなく変更するとはどうしても思え

なかった。森は電報を打ってからきっかり二週間後にブロクトンを訪れているから、充分な考慮の末の変更であったことは確かである。森の第二次在米時代のまさに始まりの時である。ハリスとの関係を考える上でも、以後の外交官としての活動を考える上でも、この予定変更には重要な意味があると思えてならなかった。

キンズレー文書の発見

長い間考えあぐねていた私であったが、先年、私は森研究の新たな資料群を見いだした。日本領事ブルークスの友人であり奴隷解放論者であった、ボストンの実業家キンズレー関連文書である。それによって私は、森が急きょ予定を変更した理由を知った。

森は西海岸から同行したブルークスに、大陸横断の車中、日本における信教の自由の実現と国民の教育にかける強い思いを語ったのである。ブルークスは森に心酔した。ボストンに行きましょう。友人を紹介します。彼はあなたに心から協力してくれるでしょう……。

二人はニューヨークを経由してワシントンに行き、国務長官フィッシュに信任状を提出。大統領グラントに謁見し、大統領主催歓迎会に臨んだ後、ボストンに向かった。森の話に心を打たれたキンズレーは、その翌日の昼にボストンの紳士の会を招集した。ロングフェローら二十人近くの名士が出席し、全面的に森に協力を約束した。キンズレーは森の求めに応じて、これから渡米してくる日本人をボストンの公立学校に入学させることを約束し、ボストンの上流家庭に日本人学生を家族の一員のように迎えるよう働きかけ、奴隷解放の論客チャールズ・サムナーほかワシントンの多くの有力者たちに森の目的に協力するよう手紙を書いて森に持たせた。

会合を終えたブルークスと森は、その日の夕刻ワシントンへと戻っていった。ワシントンで諸用務を済ませたのち、森は属官一人と留学生一人を伴ってブロクトンを訪問した。ブロクトンに四泊し、留学生をハリスに託すと、森はその足で再びボストンに向かった。

森は米国上陸早々、願ってもない協力者を得たのであ

る。ここに彼の比類ない活動の端緒が開かれた。それは取りも直さず、彼がハリスから得た芯なるものに裏付けられた明確な目的をもっていたからにほかならない。そして、その強さと情熱がもたらした新たな出会いが、逆に、森の第二次在米時代におけるハリスの影響を相対的に減じさせることになったのである。大陸横断途上の予定変更は、森にとっても、わが国にとっても、重要な転機であった。終生ハリスの忠実な徒であったとされる盟友鮫島との違いを挙げるとするなら、森がアメリカ到着直後にこの新たな出会いを得たことであろう。思いがけない重要な資料の発見であった。[注]

ブロクトンを辞して再びボストンに向かった森が最初にしたことは、のちに同志社を創設する新島襄との面会であった。面会の場を整えたのもキンズレーであった。

幕末に密出国した新島は、当時ボストン近郊のアンドーヴァー神学校で日本への宣教師となるべく学んでいた。森は後日、外務省に新島の国外脱出の罪を許し、海外留学免状を渡されたい旨を申し立て、新島に日本に米国式の学校をつくり監督にならないかと誘った。

着任から四か月後、森は本国政府に対して、着任後初めての上申書を提出する。国立公文書館に「少弁務使森有礼耶蘇宗ニ付意見書」と題して所蔵されている文書である。森自身は「宗旨一条伺」と記して筆を起こしている。「現今の国内の衰頽(すいたい)は政治に宗門をかかわらせているためである。ゆえに政府は何宗にもかかわらないことを全良とすべし……。」「知識を広くし道理を明らかにすれば宗旨のことで迷い患うことがないのであるから、学校を起こすことが最大の急務である……。」彼は、天皇を中心とする祭政一致の政府に対し、政教分離の必要と教育の重要性を強く説いたのである。

日本における信教の自由の実現と国民の教育の創出。これがまさに森がブルークスに、そしてキンズレーに語った彼の渡米の目的であった。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）

注 本連載は新出資料が多いため個々に対応する紙幅の余裕がない。資料の扱いについては最終回で一括して述べたい。